THE SAISON FOUNDATION
viewpoint
【vjú:póint: 視点、観点、見地、立場】
75
The Saison Foundation Newsletter
10 July 2016
セゾン文化財団ニュースレター 第75号
2016年7月10日発行
http://www.saison.or.jp
公益財団法人セゾン文化財団

特集◉文化＋まちづくり
――社会デザインにおける「関係性」の物語――

当財団では本年度より、新しい助成プログラム「創造環境イノベーション」を開始した。
このうち「スタートアップ支援」では、独自のアイデアに基づいた新規事業を支援する。本年度採択されたのは、
岡山県真庭市と東京都立川市で展開中の、いずれも演出家の主導による「まちづくり」事業である。
本号では、演劇活動によって培われた視点から社会との新たな関係性を探る二つの事業をケーススタディとして
紹介するとともに、文化を取り入れた「まちづくり」において、何が大切なのかについて考えたい。

01 姜 侖秀◉パフォーマーが地域おこしに関わる私的な例 p.001
02 倉迫康史◉立川市モデルの確立を目指して ～たちかわ創造舎の挑戦～ p.005
03 中村陽一◉文化と社会デザイン、コミュニティデザイン ――関係性を活かすワーク、編み直すワーク p.008

01

姜 侖秀
Yoonsoo KANG

パフォーマーが地域おこしに関わる私的な例

Come Across:（自分の意志と関係なく、ものや人、出来事など）～に出くわす、～を見つける

この話は岡山県北部の静かな山間地域、真庭市北房地区のある空き家から始まります。しかし、話をその空き家から始めることだけで、実はこの家をきっかけにあなたとこの地域が創り出す物語がこれからのドラマの中心プロットになります。いきなり舞台の上に立たされてびっくりしました？ でも、ドラマってそういうもんなんです。ある日いきなり、何か、誰かとCome Acrossすることから面白いドラマは始まるでしょう。興味を引くために無理やりあなたを巻き込もうとしているわけではありません。あなたが登場することでこのドラマが大きく変わっていくからです。今この文を読んでいるあなたがどこにいるか、今までこの地域との縁があったかどうかとも関係なく、この5,000字の旅が終わる頃にはあなたも納得できて、抵抗なくこの舞台の上にいることを楽しめるようになると思います。真っ白の状態から始まる舞台の上での旅、Impro（Improvisation, 即興）はそういうもんだからです。

旅の始まり

今私たちの目の前に広がっているのは日本海です。不思議ですが、私はいつも日本海の波の音を他の海より特に大きく感じます。あなたにはどうですか？ 海っていつも人をワクワクさせますね。よい旅が始まりそうです。では、日本海を背にして南に走る国道313号に乗りましょう。そのまま鳥取県を通って、ジャージー牛で有名な蒜山高原から真庭市が始まります。湯原温泉を過ぎてずっと南に走ると、いつの間にか、あまり高くない山を背景に田んぼが広がっている風景に入ります。もっともっと南へ向かって走り、「水田米」というお米で有名な水田を過ぎて、また田んぼを過ぎて、少し商店街を通って、また田ん

草を刈ってやっと家が見えるようになりました。撮影：June-young Park

ぼを過ぎると、ストップ！ 今、右に見える家が私たちの物語の舞台になる空き家です。今は草を刈って家の形が見えるようになりましたが、最近までものすごい草や木で家も周りの田んぼもよく見えませんでした。草を刈ってもあまり目立たない‘普通の家’なので、言われないと見逃してそのまま国道313号を走って瀬戸内海まで行ってしまいます。無理してよく見ても何の特徴もない、この‘普通の家’に行ってみましょう。

コスモポリタン田舎づくり

「インターナショナル・シェアハウス・照（テ）ラス」へようこそ！ これからこの家は6人の一般入居者と1人のアーティストが一緒に居住するシェアハウスに生まれ変わります。シェアハウスというのは、ゲストハウスとは異なって、賃貸者契約を結んで正式に入居する共同居住空間を言います。それなので、観光客向けの宿泊施設、ゲストハウスより少人数で数ヶ月以上長期滞在するようになります。一般入居者は主にワーキングホリデーで来日した外国人で、地元のカフェや農家など、様々な業種で働く人になります。彼ら、彼女らは、新しい目線で眠っている地域資源を再発見し、それを住民と共に新たな地域のコンテンツとして発展させていきます。1人のアーティストは自分が持っている専門知識や経験を活かしたカリキュラムで地域の子供達に触れ合いながら、地域に根付いた創作活動を行います。ようするに、「体験型シェアハウス」と「アーティスト・レジデンス」を一つにした空間だとも言えると思います。しかし、この「照ラス」にはもっと色んな仕組みが隠れています。新しい目線を持っている人が住民と地域に出会い、その触れ合いから生まれる様々な物語が地域の課題を解決していくキーになり、アーティストが創っていく作品の養分にもなります。私は、このすべての仕組みに「コスモポリタン田舎づくり」という名前をつけました。ここで明確にしておかないといけないのは、このタイトルが‘田舎を外国風に作る’という意味ではなく、‘新しい目線で田舎を再発見していく’という意味を持っていることです。これは、この舞台で行われるすべての行為の主体は誰かという根本的な定義とつながり、このすべての話が始まった私の「主体」についての問題意識までにも根を下ろしています。

フラッシュバック

時間を6年前に戻してみましょう。ここはソウルのある飲み屋で、私は演劇の仲間たちと一緒に韓国焼酎チャミスルを真ん中において一生懸命話しています。会社を辞めて未だよく知られていないPhysical Theatreをイギリスに勉強しに行くことを決めた直後です。私の仲間たちは演劇人として生きて行く過酷な現実を語りながら、私の無謀な計画について愛情を込めた助言を与えてくれています（助言と言ってますが、‘やめて’ということでした）。実は未来に関してそこまできちんと整理できていなかったのですが、その時彼らの質問に答えながら、なぜ自分がこういう道を歩むようになったのかが明確になってきました。それは「主体」の問題です。

俳優として舞台に立っているうち、私の心に浮かんできた疑問は、‘私がこの舞台の上で切実に体感していることが、観客にも同じ重さで伝わっているのか’でした。良い俳優だったら作品の中で一生懸命それを伝えようと努力すると思いますが、理性より浅知恵がよく働く私は、観客と私の境界に疑問を持つようになりました。観客が劇の内・外で創作に関われる構造を作り、観客自身も知らぬ間に創作行為の主体となれたらどうかということに興味を持つようになりました。それで劇づくりの構造自体も自由に考えられるPhysical Theatreを専攻に選んだと思います。そう言った構造に関しての妄想が少しずつ現実的な形を持つようになったのが、作品を創作する段階から地域コミュニティーと連携していく「地域の遊休施設を創作拠点にするインターナショナル劇団」でした。沢山の劇団や小劇場が集まっている都会の制作システムから離れ、地域社会の一員として役割を持ちながら創作活動を行うと経済的な持続可能性も期待できると思いました。2014年千葉県の中房総国際芸術祭「いちはらアート×ミックス」に参加して、1年間地域住民をインタビューし、廃校や公民館を活用して作品を発表したのもこの構造を実現してみる機会になりました。芸術祭が終わった後はその構造を持続的に実現する場を探し続けてきました。そこで目にとまったのが、個人が自発的に持っているミッションを必要とする地域につなげてくれる真庭市独特の協力隊制度でした。そして2015年7月、縁もゆかりもないこの地域にたどり着きました。

また現在

6年があっという間に過ぎましたね。実際そう感じています。一人の妄想から始めたことが、心温かい人々に出会い、私を必要とする地域に出会い、実現できることを目前に控えています。今私たちの目の前にある‘普通の家’がその証拠です。正直、このプロジェクトを始めたのは私ですが、それを実現させたのは私ではないと感じています。アーティストの創作活動と地域おこし、地域の国際交流や遊休施設の活用という、各々の大きい課題を一つのプロジェクトに全部入れて説明しようとすると、とても解りにくい説明になってしまいます。今私たちはこういうゆっくりお話できる機会があって良かったと思いますが、初めて会う人にこの仕組みのすべてを説明するのはとても難しいことです。しかし、説明するだけではなく、シェアハウス対象物件を探したりする具体的な活動になると、まだこの地域に入ってきて1年も経ってない私一人ではほぼ不可能な話だと思います。まち歩きをすると沢

「クラウドファンディング官民連携事業」の事業発表会でのプレゼン（左が著者）
撮影：福井 学

「クラウドファンディング官民連携事業」の事業発表会後の記念撮影（前列右から3人目が著者）
撮影：福井 学

山あるように見える空き家ですが、中に仏壇が残っていたり、年に何回かよそに出た家族が帰ってきたり、または地域コミュニティーを考えてよく分からない人には家を貸すことに抵抗を感じたりするという様々な理由で、一人の力では家を探すだけでも1年はかかりそうな仕事でした。そこで、真庭市役所、北房振興局という存在が大きい力になりました。真庭市が務めてくれた役は大きく3つに分けることができると思います。まず、私と地域住民間の仲介、そして県や総務省など上級官庁との連携、最後には市役所内の様々な部署への仲介です。地域や行政の仕事を良く知らない私はやりたいことがあってもそれをどう、誰とお話しして実現すれば良いのかがわかりませんでした。それなので、想像の世界で存在していたこのプロジェクトを今の形に作ったのは真庭市の職員の力だったと思います。このプロジェクトが、総務省が主催する官民連携事業、「ガバメント・クラウドファンディング」のモデル事業に選ばれて不足している資金を集めることができたのも、真庭市の積極的な動きがあったからこそ成し遂げられたことです。また、セゾン文化財団や日本ワーキングホリデー協会という信頼されている組織と連携していることで、地域や上級官庁から信頼感を得たこともプロジェクトが始まる段階で大きな力になりました。特にセゾン文化財団の2016年度創造環境イノベーション支援事業に選ばれ、事業を始めるシードマネーを確保することができました。今後アーティスト・ネットワークを構築していくためにも緊密な連携が必要だと思います。

地域資源の新しい使い方、
北房生活交流グループのお母さんたちが作る夏のきゅうりソバギ（きゅうりキムチ）　撮影：江崎 仁

話が長くなりました。ハウスに戻って、「コスモポリタン田舎づくり」というものが実際どういうことなのかを実例を紹介しながら話したいと思います。そうするとあなたの役割もわかるようになると思います。

いきなりキムチ

着任後、まち歩きをしながら担当地区の北房の方々と色んな会話を交わしていた時、梨の規格外品が多いとのことを知りました。韓国で梨は高級食材なので、とてももったいないと思いながら、私が小さい頃、お母さんのすりおろした梨を入れた白菜キムチを思い出しました。‘梨を使ってキムチ作りをしたら良いですね。’と、よそ者で新参者の私の一言を地域は聴き流さなかったのです。お味噌や漬物を作っている地域のお母さんグループ、北房生活交流グループが喜んで主体になってくれました。振興局や市役所は頼もしいバックアップになってくれました。廃校になった阿口小学校がある阿口地域の方々は学校の体育館を会場として提供してくれました。こうして私の発言から1ヶ月も経たない間に、地域での「梨を使った韓国本場の高級キムチ作り体験」の準備がほぼ終わりました（私は料理人ではなく、演劇人だということを忘れないでくださいね）。私はこの熱い地域の思いを韓国の中でも‘味のふるさと’と呼ばれる美味しいキムチを作っている全羅南道の道庁にメールにて伝えました。そして全羅南道庁は韓国に30人しかいない調理名人をキムチ作りの講師として紹介してくれました。100人を超えた参加者が集まった体験イベントが好評で終わり、今北房生活交流グループは地域のキムチスペシャリストになり、本場のレシピを地域の土地に合わせた新しい地域の宝、オリジナル・キムチの開発に成功しました！ 市場でそのキムチを買える時がもう少しでやってくるとワクワクしながら待っています。いつかは地域の遊休施設を活用したキムチ作り体験場ができるかもしれませんね。

私をシェアハウスの入居者だと考えたら、「コスモポリタン田舎づくり」がどういうことをやろうとしているかが見えると思います。イギリス人が来たら、イギリスの水と同じく石灰質が含まれている北房の水に着目して、イングリッシュ・アフタヌーンティー作りを提案するかもしれません。木で作られたクリスマスのおもちゃが有名なドイツ人が来たら、真庭の木でクリスマスのおもちゃ作りを提案するかもしれません。多彩な文化圏の人が住民と共に新しい地域資源の使い方を発掘し、それを地域のコンテンツとして遊休施設を活用した事業に発展させ

地域住民のライフスタイルを題材にした映像の試写会を終えて、
出演者や製作スタッフ、住民と一緒に（前から2列目、右から3人目が著者）　撮影：福井 学

ます。また、ここで得た収入や家賃収入をアーティストによる教育活動に使って、1軒のハウスあたり1人のアーティストが安定的な収入を得ながら創作活動を行っていくことを目指しています。

住民、入居者、アーティストがそれぞれの役割の主体になり、またお互いが密接に連携して共に進めていきます。地域という舞台で、みんなが毎瞬間Come Acrossしながら新しい物語を作っていく、その姿を「インターナショナル・シェアハウス・照ラス」が美しく照らすようになったらと思います。

舞台

お待たせしました。ここからがあなたの出番です。田んぼに囲まれているこのハウスの裏には元々小屋が建っていた敷地があります。その敷地に大きくも小さくもない木の舞台を設置しようと思っています。ここには入居者や住民はもちろん、誰でも自由に寄って、お茶でも飲みながら、風景や人との触れ合いを楽しむことができます。秋の収穫が終わった後には田んぼを客席にして、舞台で何か面白い公演を行うかもしれません。でも、無理に特別なことをしなくても良いと思います。いろんな人がその舞台の上で日常的な姿を見せるだけでもとても面白いドラマになると思いますので。ハウスのオープンは今年の8月です。ぜひその舞台に立ってください！

撮影：June-young Park

姜 侖秀（カン・ユンス）

ソウル出身、St. Mary's University（ロンドン）、Physical Theatre大学院卒業。6ヶ国9人のアーティスト団体「CakeTree Theatre」を立ち上げ、芸術監督に就任、英・韓で活動する。2012 年、韓国密陽国際演劇祭若手演出家展演出賞・作品賞受賞。ブリティッシュ・カウンシル、韓国芸術経営支援センター主催「韓・英アーティスト交換プログラム」韓国側代表。2014年中房総国際芸術祭「いちはらアート×ミックス」にて1年間地域住民をインタビューし、廃校や公民館を活用した作品を創作して発表する。現在、真庭市の地域おこし協力隊として、2016年8月オープン予定のインターナショナル・シェアハウス・照ラス開設事業を手掛けている。

http://www.iterasu.org/

02

倉迫康史
Koji KURASAKO

立川市モデルの確立を目指して
～たちかわ創造舎の挑戦～

旧多摩川小学校校舎外観

活動開始に至るまでの経緯

2004年に廃校となった旧多摩川小学校を活用する、「旧多摩川小学校有効活用事業」の事業者募集を立川市が始めたのが2012年。その結果、豊島区ですでに「にしすがも創造舎」という廃校活用の実績があったNPO法人アートネットワーク・ジャパン（以下、ANJ）が選定された。

ANJは施設全体の管理を行いつつ、2棟ある校舎の内A棟において、創業・起業の支援を行う「インキュベーション・センター事業」、学校施設を撮影スタジオとして貸し出す「フィルムコミッション事業」、多摩川沿いのサイクリストが立ち寄る情報発信の場としての「サイクル・ステーション事業」の3事業を行うことを立川市から求められた。そして、それら全体をディレクションするチーフ・ディレクターに、立川市へのプレゼンをANJと共に進めてきた私が就任した。

3年間の準備期間を経て、2015年9月27日、たちかわ創造舎は産声を上げた。3年の間に、私たちは多くの立川市民の方や、立川を拠点に活動をしている方にヒアリングを行い、立川市や多摩エリアの文化状況と地域課題について、取材と熟考を重ねた。その長い準備期間が、現在において大きなアドバンテージになっていると実感している。

文化創造施設としてのミッション

「旧多摩川小学校有効活用事業」の前述の3事業は立川市から掲示されていたものだが、文化創造施設としてのミッションは私たちが発案した。そのミッションとは、以下の三つである。

① たちかわ創造舎を開かれた対話の場とし、人々が共に生き、共に暮らすための「知恵と技術＝文化」を学ぶ場を作る。たちかわ創造舎を、対話から文化が生まれる場にしていくために尽力する。
② たちかわ創造舎に集まる若手アーティストやアスリートに活動の場や情報を提供する支援を行っていく。同時に、専門的な知識や体験を得たい市民にプロフェッショナルなアーティストやアスリートを講師にした学びを提供する。
③ 周辺団地の活性化、サイクリングロードの安全性と利便性の向上、立川駅南側の文化拠点のネットワーク化など地域課題を解決することをめざした事業を提案していく。

「対話から文化を生む」「プロフェッショナルによる学び」「地域課題の解決」、この三点を目標に、たちかわ創造舎の文化事業は行われている。そのため、にしすがも創造舎とは違い、稽古場利用などのスペース貸出しをメインとせず、プロジェクト・パートナーズやシェア・オフィス・メンバーといった、たちかわ創造舎を拠点に活動を行うアーティストを、施設を共に運営するメンバーと位置づけ、地域住民や立川市民に向けて継続的な活動を行っていくことを目指している。なお、これらの文化事業は「交流等創出事業」と位置付けられる。

つまり、たちかわ創造舎は、インキュベーション・センター事業で「人材の育成」、フィルムコミッション事業で「収益の獲得」、サイクル・ステーション事業で「アクセスの整備」と、施設運営のための「人・収益・アクセス」の獲得を行いながら、文化事業による交流を創出することによって施設運営の特色を出すという運営形態を取っている。これは全国的にも類例のない文化施設ではないだろうか。

たちかわ創造舎の多岐にわたる活動

昨年度は、9月にオープンしてから半年の間に、サイクル・ステーション事業として『サンセット・シクロクロス』『TAMAGAWA水の道・らいど2015』などの自転車イベントを共催。主にスポーツサイクルのためのTachikawa Cycling Schoolでは、基礎から学べる『じてんしゃの学校』や、自転車の楽しみ方を提案する『湧水をたずね、野点であそぶ』などを行った。これらのイベントは、スポーツサイクルの初心者からベテランまで、参加者の方の評価や満足度が高く、自転車業界から注目と期待が高まっているのを実感している。

学校の施設を撮影に貸し出すフィルムコミッション事業も、ほとんど毎日のように問合せやロケハンが入り、ドラマやCM、ミュージックビデオ、写真の撮影などに使われている。近隣の住民の方々の協力を得ながら、早朝対応など弾力的な運営を行っている。今年度からはフィルムコミッション事業専門のスタッフが二人加わり、たちかわ創造舎の財政的な基盤を支えている。

起業や創業に向けたアーティストの活動を支援するインキュベーション・センター事業では、昨年度に演劇集団の「風煉ダンス」、パフォーマンス・カンパニーの「すこやかクラブ」、イラストレーター＆チョークアーティストの「Chalk2U（チョークトゥユー）」がシェア・オフィス・メンバーとして入居して活動開始、今年度の夏には4団体目の劇団「鮭スペアレ」が加わる。メンバーは創造舎で創作を行うだけでなく、今年度は彼らが企画したワークショップや公演も舎内で行われる。

オープニング公演『想稿・銀河鉄道の夜』　撮影：須崎隆善

シェア・オフィス・メンバーは、オープン前より募集を開始し、私とチーフ・マネージャーが必ず立ち会い、一次面談、企画書の提出、二次面談という慎重かつ厳正な手続きで進め、決定した。

シェア・オフィス・メンバーとは別に、たちかわ創造舎の事業に協力してもらうプロジェクト・パートナーがいる。恐竜だけでなくサイエンスや博物館に詳しい「恐竜くん」、立川市の地域密着型自転車レースチームの「東京ヴェントス」、立川市を拠点に海外でオリジナルの作品を発表するために活動する現代演劇ユニットの「MY COMPLEX（エムワイ・コンプレックス）」、そして私が主宰する劇団「Theatre Ort（シアター・オルト）」である。

恐竜くんにはオープンイベントの際に子どもたちに向けたワークショップを行ってもらい、東京ヴェントスはたちかわ創造舎の一階にショップ兼オフィスをオープン、サイクル・ステーションの一翼を担っていただいている。MY COMPLEXは、今年度の5月にスタートした「たちかわ・コミュニケーション・スクール」で、演劇で英会話を学ぶ全8回の講座「ぷれいご」を6月まで開催。Theatre Ortはオープン記念公演として『想稿・銀河鉄道の夜』の上演を創造舎内で行ったほか、今年度からは平日夕方に大人と子どものための演劇公演「放課後シアター」を企画製作している。

このように、たちかわ創造舎の内部で行われている活動だけでも、非常に多岐に渡っていることがおわかりいただけるだろう。しかし、たちかわ創造舎の活動は創造舎内部にとどまらない。行政や他の組織、施設と連携した、舎外での企画も同時進行で動いている。

演劇による地域課題の解決 ～連携の重要性

たちかわ創造舎の活動は舎内にとどまらない。それはなぜか。たちかわ創造舎が「地域課題の解決」を文化創造施設としてのミッションに掲げているからである。

東京のベッドタウンとして発展した立川市は、少子化による廃校の再利用、団地の高齢化への対応、市民会館の活性化が地域の課題となっていると、私は3年間の準備期間の間で理解した。

子どもたちがいなくなった学校、人の少なくなったマンモス団地、そして従来型の貸館業務を中心とした市民会館。昭和に東京郊外で数多く生まれた、学校と団地と市民会館。コンクリ色で、デザインにこれといった特徴のない、けれどかつては多くの人が集った場所。おそらく、立川市以外でも東京周辺の地方都市でよく見られる光景である。この三つをつなぎ、新たな付加価値を見いだし活性化することができれば、他の多くの地方都市へのモデルとなりうる。

加えて、立川市は立川駅から北側と南側で大きく性質が違うことも、立川市民の多くの方々から指南していただいた。立川駅の北側は、パブリックアートとして大きく展開された「ファーレ立川アート」があり、昭和記念公園を始めとする商業イベント用地も数多くある。また、立川基地跡地の再開発が進めば、さらに大型の商業施設やエンターテインメント施設が建設されるだろう。

一方、たちかわ創造舎のある南側は多摩川、農園、緑地に恵まれ

ている。その中に、芸術文化の創作と発信の拠点が点在している。大規模開発が進む北側に比して南側はリノベーションによる記憶の継続とアーカイブを行っていくことができる。

こうした準備期間のリサーチをもとに私は、演劇によって地域の連携をはかることで、地域における演劇の価値向上と住民の演劇への親和性を高めることを目指す「立川〈南側〉創客プロジェクト」と、立川市と公益財団法人立川市地域文化振興財団とたちかわ創造舎が連携して、立川市の公共ホールを活性化する「立川シアタープロジェクト」を構想した。

立川〈南側〉創客プロジェクトは当初、次の3つの事業を3年計画で想定していた。

1. **団地内の図書館と連携。図書館演劇として「よみしばい」を上演**
   市立多摩川図書館など立川市内で三館を運営する指定管理会社と協力して、親子で楽しめる演劇公演を開催。0歳児から観劇可とし、多世代が知っている児童文学の名作を上演する。

2. **団地内の小学校と連携。演劇ワークショップや演劇鑑賞事業の実施**
   富士見町団地内にある小学校は、団地に住む児童のほとんどが通う。学校長、教育長と密に連絡を取って、立川市のすべての小学校で実施できるようなモデルケースを作る。

3. **演劇的手法を使ったコミュニケーション・スクールの実施**
   多世代多国籍のコミュニケーションを実現する演劇ワークショップや、文化ボランティア育成のリーディングスクール、子ども達の居場所を作るキッズ・スクールなどを開催。

現在はこの3つにとどまらず、立川駅の商業施設エキュート立川でのよみしばい公演の実施や、立川市商工会議所と連携した観光事業と演劇の融合、立川市青年会議所と連携した立川シティプロモーション用のショートムービーの製作協力など、〈南側〉だけでない広がりを持ったプロジェクトになりつつある。

たちかわシアタープロジェクト ～演劇の持つ力

さらに今年度は、「たちかわシアタープロジェクト」がスタートする。前述したとおり、立川市、公益財団法人立川市地域文化振興財団、たちかわ創造舎を運営するANJが実行委員会を作り、立川市の公共ホールである「たましんRISURUホール」と、隣接する元・立川市役所をリノベーションした「立川市子ども未来センター」を活性化する事業を展開する。

本原稿作成時点で詳細は発表できないが、たちかわシアタープロジェクト実行委員会は、2016年9月16日（金）～25日（日）にはシェア・オフィス・メンバーである風煉ダンスによる立川市子ども未来センターでの野外劇『スカラベ』公演を後援するほか、12月23日（金）と24日（土）には、たましんRISURUホール大ホールで上演される、たちかわ創造舎ファミリーシアター『アラビアンナイト』を主催する。

「立川〈南側〉創客プロジェクト」と「立川シアタープロジェクト」は、たちかわ創造舎が地域課題を解決するための両輪を成すと、私は考えている。地域課題の解決とは、つまるところ「コミュニティの再生」であり、演劇にはコミュニティの再生を促す力がある。その力とは「言葉によって心を通い合わせること」と「日常をひととき非日常に変えること」の二つであり、一般的な言葉に置き換えると、前者を「コミュニケーション」、後者を「祝祭」と呼ぶ。

コミュニケーションとは「ことばや体を媒介に心を通い合わせていくこと」であり、それが地域住民同士の支え合いにつながる。祝祭とは「普段とは違う空間で、普段とは違う人間関係で、普段とは違う時間を過ごすこと」で、見慣れたはずの風景や慣れてしまった人間関係の新たな魅力を発見することにつながる。

同時に、コミュニケーションも祝祭も限定的なものであり、万能ではないことから、私たちは日常を生きていかざるを得ないこと、他者と心が通わないことが多いことも知っていき、それがコミュニティを生き抜く知恵へとつながっていく。

たちかわ創造舎が、各種事業によって、特に演劇を通した事業によって、コミュニティの再生という地域課題の解決に寄与できるかどうか。行政、公共ホール、商工会議所、商店街、学校、図書館など

教室での「よみしばい」公演

エキュート立川での公演

と横断的に連携することで、どこまで相乗効果を高めることができるのか。そして、それをアーティストがディレクションする施設として、どうやって進めていくのか。

これらの挑戦が成功すれば「立川市モデル」として、各地方都市の参考になるだろう。そのことを信じて、2020年度までの5年間運営を行い、できれば10年間、挑戦したいと望んでいる。

倉迫康史（くらさこ・こうじ）

1969年生。宮崎県出身。舞台演出家。Theatre Ort主宰。Ortとはドイツ語で【場】の意味。2000年、現代舞台芸術ユニットOrtとして始動。シアターカンパニー Ort-d.dを経て、現在、Theatre Ort（シアター・オルト）として、たちかわ創造舎を拠点に活動。「すべての場を劇場に」をコンセプトに、劇場以外の場所で演劇を上演する【場】作りの実績を重ねている。上演作品には、子どもやファミリー向けの名作文学を演劇化した作品と、日本の近代文学や海外の古典戯曲などの語りを魅力にした作品がある。劇団公演以外にもオペラやミュージカルの演出を手掛け、特に2007～2013年まで構成・演出をつとめた「子どもに見せたい舞台」シリーズは毎年好評を博した。2015年から、たちかわ創造舎チーフ・ディレクター。洗足学園音楽大学、桜美林大学講師。演劇やリーディング、コミュニケーションのワークショップも数多く行っている。

たちかわ創造舎：
http://tachikawa-sozosha.jp/
Theatre Ortブログ：
http://ort-dd.jugem.jp/

03

中村陽一
Yoichi NAKAMURA

文化と社会デザイン、コミュニティデザイン
――関係性を活かすワーク、編み直すワーク

はじめに

40年近く試行錯誤してきたことがある。キーワード風にいえば「つながり」とか「関係性」、これまで積極的に関わってきた事柄でいえば、「ネットワーキング」「社会デザイン（ソーシャルデザイン）」「コミュニティデザイン」といったことだ。具体的なかたちであり、場であり、担い手でもある「NPO/NGO」「ソーシャルビジネス」「コミュニティビジネス」「社会的企業」といういい方もできる。

他方、表現とそれが展開される場についても考え続けてきた。今日的にいえば、アートとソーシャルデザインということになろうか。

近年、これらの課題群はぐっと互いの距離を縮めている。まだまだ混沌としているといってよいだろうが、それだけに、各所で面白く大事な試みも始まっている。今回、本紙から考えてみてくださいといっていただいた「文化を活用したまちづくり」「コミュニティの活性化」も、まさにそんな時代背景から出てくるテーマといえるだろう（とはいえ、それを〈アートと社会との向き合い方〉ととらえるなら、先人たちが多彩なかたちで取り組んできた古くて新しい課題ともいえる）。

「公共ホール・劇場とまち」という切り口から

手前の取り組みの話からで恐縮だが、私が所長を務める立教大学社会デザイン研究所は、2014年度から「劇場法の要請に応える、公共ホールスタッフのための社会デザイン力養成講座――地域コミュニティ、共生社会、絆を生みだす場所と事業のマネジメントを学ぶ」（文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」）を進めており、全国のホール・劇場運営当事者、自治体の担当者、アーティスト、活動に関わる地域住民・市民、関連分野の研究者・大学院生・学部生等に参加していただいている。

講座のタイトルにもなっているように、2012年6月、「劇場、音楽堂等 の活性化に関する法律」（以下、「劇場法」）が施行された。その背景にある社会的課題の解決に向けて、これからの公共ホール・劇場のあり方、そこで求められる「人財」について 社会デザインという視点から考えていこうというのが、講座主旨である。

公共ホールはこれまで、地方自治法に基づき、整備されてきたが、新しく施行された劇場法では、地方自治法にはなかった公共ホールの担うべき機能が求められている。「人々が集い、人々に感動と希望をもたらし、人々の創造性を育み、人々が共に生きる絆を形成するための地域の文化拠点」、「人々の共感と参加を得ることにより『新しい広場』として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能」といった点である。さらに具体的な活動として事業の企

画や、普及啓発活動の実施に加え、「事業の実施に必要な人材の養成を行うこと」「地域社会の絆の維持及び強化を図るとともに、共生社会の実現に資するための事業を行うこと」が掲げられている。

前掲のプログラムは3年度目に入り、公共ホールに求められるあり方の変化に伴って、社会デザイン（ソーシャルデザイン）、コミュニティデザインといった、これまでとは異なる発想の仕方と方法で、社会の仕組みや人々の参加・参画の仕方を変えていく具体的な思考や実践が必要になってきている点は講座参加者にかなり共有されてきた。

しかし、ではどのような取り組みが考えられるのか、まだ公共ホール・劇場関係者に具体的なノウハウや明確な目的意識が広く顕在化しているわけではないし、地域の側にも文化芸術分野をはっきり意識したまちづくりの取り組みが広がっているわけではない。残念ながら現時点では、可能性をはらんだ取り組みも含めて、限定的であったり、分野内に「閉じた」ものになっているのが現実である。

この状態を打開していくためには、文化芸術中心主義的な取り組みに閉じることなく、また逆に、文化をまちづくりのたんなるツールとしてのみ考えるのでもなく、二項対立（文化芸術性vs地域性）ではない相互乗り入れの往復運動が可能なパートナーシップの場づくりとそれを担うことのできる人が必要になってくるだろう。

ただし、たとえばコーディネーターが外から舞い降りて、鮮やかに課題を片付けるといったことは、実際には起こり得ないし、それが可能だと考えるのも傲慢なことだ。関係性「を」外からデザインするのではなくて、関係性「が」内からデザインするのだ。近年、特徴ある活動をしている公共ホールは、ホールの外に出かけていって、地域で人と人との関係性を醸成しながら、ホールの運営にフィードバックしている。大都市であっても、離島であっても基本原則は同じだと言える。地域には地域固有の自然環境があり、積み重ねられてきた歴史があり、その中で生まれた地域の文化や作法がある。それらを無視して、たとえば著名な演出家や俳優の作品を上演しても、それが地域社会に応える公共ホール運営に繋がっているかどうか疑問だ。固定した枠組み・観念での出し物や形式的な市民参加ではなく、地域の関係性がデザインする動き＝新しい関係性を創造することが肝要である。

ソーシャルデザイン、コミュニティデザインの方法

では、どのような実践が必要なのか。簡潔な整理でわかりやすいアンドリュー・シー『グラフィックデザインで世界を変える（原題“Designing for Social Change”）』（BNN、2013年）中の「ソーシャルデザイン、コミュニティデザインの方法」を参照しつつ、以下、私見と経験を交えて敷衍してみたい。

1) 現場に飛び込む。地域の現場に飛び込み、コミュニティとの関わりをつくりだすこと。コミュニティに巻きこまれ、同時にコミュニティもムーブメントに巻きこまれていくような関係性を創り出すこと。
2) 信頼関係を築く。顔と顔が見える関係性、時間をかけた信頼関係を創り出す。
3) できることと、できないことをはっきりさせる。早く信頼関係を築こうとして、何でも簡単に約束するのではなく、できることをきちんと見定める動きをすること。
4) プロセスを重視する。コミュニティオーガナイズ、コミュニティディベロップメントというまちづくりの場面の場合、プロセスが大事であると同時に、そのプロセスを可視化し、外に発信することも重要である。
5) 摩擦を避けない。地域からのクレームなどもこれに相当する。クレームには、実は地域のニーズが隠れている。とすれば、クレームを丸く収めようと対処するより、相手が本当は何を言いたいのか、摩擦を避けずに向き合う運営の仕方が必要になる。
6) コミュニティの強みを知る。コミュニティの強みと弱み、機会、チャンス、リスクを知ること（いわゆるSWOT分析）で、自分たちの地域がどのような場かを分析し、その地域のいいところ、強みやチャンスがある部分を発展、拡大させていくこと。
7) 地元のリソースを活用する。リソースはわかりやすく目の前に転がっているわけではない。現場に飛び込み、隠れたリソースを発見すること。異なる視点を導入することで、地元の人たちにとって身近だが見過ごされてきたものが、貴重なリソースとして発見されることもある。物やお金ではなく、人や歴史的に蓄積された情報や場が発見されることも多い。
8) コミュニティの声を聴く。たんにアンケートを取り、ご意見ください ということではない。いまある市民参加の限界も、自ら手をあげて参加してくれる人、とりわけ声の大きい人の意見が通りがちなことにあるが、ここでコミュニティの声を聴くとは、グラスルーツの「声なき声」を引き出していくことである。
9) デザインがコミュニティのものとなるようにする。プロセスから共にコミュニティと歩んでいくことで、デザインをコミュニティのものにすること（～のために［for］ではなく、～とともに［with］）。著名なファッションデザイナーがファッションショーに出品するような作品ではなく、普段の機能や使い勝手をしっかりと組み込んだデザインをすること。たとえば建物としてのデザインも、「コミュニティのものとなるように」ということが一番大事なのだ。
10) 関わりを継続する。いったん関わり始めると抜けられないのが人の関わり。コミュニティも関わりが継続される。その意味で、ときには瞬発力も必要だが、持続力・継続力ある活動が必要である。プログラムを例にとっても、作家性や作品のみに重きを置くのではなく、地域との関わりをつなげていく、継続していくためのひとつの方法としての「レパートリー」という考え方も可能なのだ。
11) コミュニティとの共同戦略。パートナーとしてのコミュニティとの関係など戦略的な運営も必要になってくる。これからは取り組みを運営する中心になる人たちには、文化・芸術という分野に関する専門性や知識ももちろんだが、まちづくりを進めていくリーダー役と同じような資質・能力が求められる。
12) ソーシャルデザインの資金、報酬を確保する。経営戦略として当然大事なことである。

これらの全体は「戦略とケーススタディと物語」ともいえる。戦略

大阪釜ヶ崎にある「ココルーム」
（本文掲載写真はすべて筆者撮影）

を持って活動し、その地域ごとのケーススタディを深め、そこにあるストーリーを構築していく。コミュニティにはデザイン上の課題が必ずある。課題が見えてくると、解決のために必要なコミュニティ、さらにはステークホルダーとの協働戦略が必要になってくる。それをどのような設計で進めていくのか、そのデザイン戦略と、ある種の仮説的なストーリーの検証を進めることによって、何らかの成果が出てくる。しかしここでも、全てが成果として出てくるのではなく、課題や教訓が提示される。この循環をつくるような方向性が大事なのだ。

関係性を活かすワーク、編み直すワーク

見てきたように、社会デザインにあたっては「関係性」が重要になるが、それが壊れるのが、災害、貧困、障がい、認知症、差別、人権等の「社会的排除」だ。いわゆる先進社会に共通して「合法的に」排除されているという例が数多く見られるのが現代の特徴でもある。日本もまた例外ではない。

劇場法をめぐって「社会包摂」という課題が論じられたように、文化と結びついたまちづくりのなかでも大切になってくるのは、この関係性を活かすワーク、編み直すワークとしての社会デザインだ。

そこでは、社会の中の豊かな10%の人たちのためではなく、例えば、環境、貧困、社会的排除の問題を解決することにつながりうる、残りの90%のための新しい価値を創り出せるような活動および事業のイノベーションが必須となるのではないだろうか。領域を横断し、越境し、境界を超える新しい仕掛けと組み合わせが出ることで、これまでになかった質が創発するための起爆剤になることを願う。そうした兆しはすでに現れている

日本三大寄場の一つ、釜ヶ崎を含みこむ大阪・西成の商店街（動物園前一番街）にあるココルームは、10代の頃から「ニューウェーブ詩人」として知られ、現在は天王寺の應典院（檀家なし、葬式なし、地域の教育文化振興に特化した劇場型の地域ネットワーク寺院）で詩の学校も開催する上田假奈代さんが代表を務めるNPO「こえとことばとこころの部屋」が運営するインフォショップ・カフェ。ここはアートと社会の接続点、人々のつながりをつくる場所をめざしている。小さな店にはアーティスト、アクティビスト、高齢者、働く人、こども、旅人等々、世代も職業も多様な人たちが集い、夜にはトークイベントやライブも開催され、情報交換の場所、発信の拠点として、真向いの「カマン！メディアセンター」とともにコミュニティの拠点となっている。最近では「釜ヶ崎芸術大学」の活動が注目されている。

関係性を編み直し、活かすワークは病院にも活動を広げている。アートの力で、病院などの医療環境をより快適な癒しの空間とすることを目的とするNPO法人「アーツプロジェクト」（自身、アーティストであ

大阪厚生年金病院小児科病棟の「ホスピタルアート」

ソウルのソンミサンマウルにある「共同保育所」

る森口ゆたかさんが理事長）はホスピタルアートの実践を広げている。

こうしたワークによるコミュニティデザインは、お隣・韓国の新しいタイプのまちづくりにおいても展開されている。たとえば、ソウルのソンミサンマウルと呼ばれる地域の住民による共同保育に端を発した活動は、社会的企業のネットワークが形成されつつ、教育・食・協同組合・アートなど多彩な分野で広がる点で、日本のまちづくりとも多くの共通点を有している。

障がい者芸術と呼ばれてきたものを「可能性の芸術」としてのエイブルアートと読み直し、地域の作業所とデザイン会社と地場の企業といった組み合わせの協働によるソーシャルビジネスにまで発展させてきたエイブルアートカンパニーのように、長い歴史を背景に持つものをはじめ、今回は個々の事例を紹介する紙幅がないが、いうまでもなく、こうしたワークによる活動やコミュニティデザインは、東日本大震災の被災地における活動も含め、求められ、活発な試みが続けられている。濃淡や成果の差異はありながらも、必死の取り組みが続いていることを付け加えておきたい。

こうしたワークは、従来型の成長経済、市場経済のみを前提とする地点からは描きにくいタイプの展望を提起しようとしている。まだ途上とはいえ、日本の社会にクロスセクター、クロスジェネレーションの実践を形成する試みは既に始まっている。

＊紙幅の制約から本稿では正面から扱えなかったが、①居場所というにとどまらず出番のある場としてのサードプレイス形成、②日本ではまだこのコンセプトでの取り組みは途上といえるが、これまでの各方面での歴史的な取り組みとも突き合わせることによってさまざまなヒントにつながりそうなSEA（Socially Engaged Art）ないしソーシャルプラクティスとしての実践、③クロスセクターでの動きを深彫りしていくための、たとえば企業メセナのイノベーションの探求、が今後の課題として大切である点は補足しておきたい。

中村陽一（なかむら・よういち）

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長・教授、社会デザイン研究所所長、独立研究科運営部長。編集者、日本生協連、消費社会研究センター代表、東京大学社会情報研究所客員助教授、都留文科大学文学部教授等を経て現職。社会デザイン学会副会長。NPO法人、ソーシャルビジネスの運営やサポートなど、現場と往復しつつ実践的研究、基盤整備、政策提言に取り組む。民学産官協働のまちづくり、コミュニティデザインの専門家でもある。座・高円寺「劇場創造アカデミー」講師、杉並区文化審議会委員等、近年は公共ホール・劇場、舞台芸術と社会デザインもテーマとなっている。ニッポン放送「おしゃべりラボ～しあわせSocial Design」パーソナリティ。編著・共著に『都市と都市化の社会学』『ひとびとの精神史6　日本列島改造』（岩波書店）、『3・11後の建築と社会デザイン』（平凡社新書）、『クリエイティブ・コミュニティ・デザイン』（フィルムアート社）他多数。

立教大学大学院社会デザイン研究所：
http://www2.rikkyo.ac.jp/web/social-design/

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第75号
2016年7月10日発行
編集人：片山正夫
発行所：公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0031　東京都中央区京橋3-12-7　京橋山本ビル4階（本年2月に左記に移転しました）
Tel: 03-3535-5566　Fax: 03-3535-5565
URL: http://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp
●次回発行予定：2016年9月末　●本ニュースレターをご希望の方は送料（92円）実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。